

アスリートに学ぶビジネス成功への軌跡(第36回)

ジム・モリス 35歳でメジャー初登板したルーキー

2021.06.15



米国のメジャーリーグのチーム、タンパベイ・デビルレイズ(現タンパベイ・レイズ)の元投手であるジム・モリスの名は日本ではそれほど知られていないかもしれない。でも2002年の米映画『オールド・ルーキー』でデニス・クエイドが演じたメジャーリーガーだと紹介すれば、あの人物か、と思い出す方もおられるだろう。

テキサスの田舎で高校教師をしていたジム・モリスは、35歳でメジャーリーグのトライアウト(入団テスト)を受けて、見事に合格。そしてマイナーリーグを経て、最年長のルーキーとしてメジャーリーグのマウンドに立つのだ。

このジムの実体験をベースに製作された同作品のクライマックスは、何といても1999年9月18日のテキサス・レンジャーズ戦だ。

地元テキサスの球場でメジャーデビュー

ゲームが行われたのは当時レンジャーズのホームだったボールパーク・イン・アーリントン。それはジムが生まれ育ったテキサス州の球場だった。球場には彼の妻や3人の子どもをはじめ、高校の教え子、同じ町に住む大勢の人たちが駆け付けた。しかし当のジムは、前日にメジャーに昇格したばかりの自分に登板の機会が回ってこようとは思っていなかった。

1対6とリードされた8回の裏、ブルペンの電話が鳴る。ジムに登板を命じる監督からの電話だった。

「ぼくですか」とわたしはきいた。「ほんとに？」みんなが笑った。

(「オールド・ルーキー 先生は大リーガーになった」ジム・モリス、ジョエル・エンゲル著／松本剛史訳)

そして…。

ブルペンのゲートが開いた。わたしは小走りに出ていった、頭のなかで何万回も描いてきた場面だったが、想像とは違った。スタジアムはあまりに大きく、観衆のどよめきはまるで大砲の砲撃を思わせ、わたしの心臓はユニフォームを震わせるほどの勢いで早鐘を打っていた。

(同著)

場面はツーアウトで迎える打者はオールスターの出場経験もあるロイス・クレイトン。一球目は外角低め、球速155キロのストレートだ。二球目も外角低めのストライク。三球目のストレートはファウルになった。4球目、球速158キロのストレートにロイスのバットが反応し、しかしスイングは途中で止まった。キャッチャーは一塁塁審にアピールした。

ストライク・スリー！

35歳のルーキーは劇的なメジャーデビューを果たしたのだ。

指導するチームメンバーに背中を押されて… 続きを読む